

二〇二一年七月二四日

趙翼の生涯と白居易

博士一年 汪洋

初めに―先行研究と問題点

趙翼（一七二七―一八一四年）は、清の乾嘉時期における史学者を兼ねて優れる詩人である。彼と袁枚（一七一六―一七九八年）と蔣士銓（一七二五―一七八五年）は、文学史上には、「性靈派」に属し、創造主義的な詩人と目されている。従来の研究は、文学理論の視座から、その「創造的な」特性を説明するものが多かったが、彼らはいかなる身分、またいかなる背景で創作しているのかに関する研究は、まだ少ない。

○市瀬 信子「袁枚と杭州詩会」（『中国中世研究』第四九号、広島大学文学部中国中世文学研究会、二〇〇六年）

乾隆前期において、創作活動が行われる場所としての杭州詩会は、優れるけれど地位が、豪商と地方長官により経済的な支援をもらった。しかし、乾隆十八年以降、領袖をつとめる優れる詩人の厲鶚と彼らを支援するパトロンが段々世を去ることによって、その華やかさが褪せた。

○王 標「正当性はいかに造られたか―蘇州における袁枚の社会的威信の伸展」（『中国中世研究』第四九号、大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター、二〇〇五年）

理学を非難する袁枚が詩壇における正統的な地位を狙えるのは、尹継善のような高級官僚が身につける国家権力に支えられたのである。

○張 寅彭「『隨園詩話』与乾嘉性靈詩潮―兼論詩話与詩說體例的區別」（『復旦学报（社会科学版）』第一期、復旦大学、二〇一四年）

袁枚は、仕官の道を捨てて、プロな詩人に丹念した。彼が退官した後に築き上げた隨園は、文人ないし庶民たちが詩文を交流する場所である。そして、彼の『隨園詩話』も、その空前的な規模で、官僚と庶民と女性の作品を差別せず、性靈という基準のもとに納めて、乾隆朝の最盛期を反映できるものである。

上記の先行研究は、袁枚の活動を支えた社会背景を検討した。しかし、「性靈派」ないし清中期の南方詩壇の共通的基础を見通すために、まずその考察範囲を拡大しなければならぬ。趙翼は、「既に好官と作るを要め、又好詩を作るを要む。勢は必ず両つを遂げ難く、官を去りて文詞を攻（おさ）む。」（既要作好官、又要作好詩。勢必兩難遂、去官攻文詞。）と述べたように、生粋な詩人と見做された。とはいえ、彼の官僚としての一面を看過できない。そして、この官僚経歴による身分こそ、彼の創作活動の礎となったということは、以下の考察によってわかる。

一、趙翼の生涯（趙懷玉『甌北先生年譜』、華夫『趙翼詩編年全集』に参照）
▼受験と北京に仕官する時期

趙翼は雍正五年（一七二七）に江蘇省常州府陽湖県西千里に生まれ、乾隆六年（一七四一年）十五歳の彼は亡くなった父の座に継ぎ、村塾の教師となった。後には故郷の各処に転んで、教師に努めていたが、乾隆十四年（一七四九年）彼は教職を失い、北京に赴いて、その才能によって、翰林院掌院学士たる劉統勳に招かれ、宮史の編選に参加させた。翌年、順天郷試に合格し、座師の汪由敦に家庭教師として招聘され、乾隆二十四年（一七五九年）汪由敦の他界まで、汪由敦の指導を受けてきた。

資料一 乾隆一七年（一七五二年）趙翼「集益齋即事戲呈休寧座主」（『甌北集』巻三、下同）

退直歸來雅興賒、閒商文史浩無涯。公於此已肱三折、我愧才非手八叉。幸有津梁先路導、何煩絲竹後堂嘩。步趨宛憶童時景、書館從師侍絳紗。

○肱三折、持家但有四立壁、治病不斬三折肱。想得讀書頭已白、隔溪猿哭瘴煙葉藤（黃庭堅「寄黃幾復」）

○手八叉（温庭筠）才情綺麗、尤工律賦、每試押官韻、燭下未嘗起草、但籠袖憑依几、每一韻一吟而已。場中曰、温八吟、又謂八叉手。（『唐才子伝』、また『太平広記』）

資料二 『甌北先生年譜』 「乾隆十九年」

初為文端屬草、好以奇警見才、文端輒刪去、先生心竊不以為然、及一年餘、浮艷矜氣、日漸刊落、乃始服文端之深于此也。二年後、凡所代擬、文端不復易一字、師弟間每相對忘言。

乾隆十六年以降、會試に幾度の失敗を重ねて、乾隆十九年（一七五四年）明通榜に取られたが、後に内閣中書の試験に参加して合格した。乾隆二十一年（一七五六年）、内閣中書より軍機処行走に選抜にされた。乾隆二十六年（一七六一一年）、遂に会試に合格して殿試に第一位と認定されたが、乾隆帝により状元から退かれて、第三位として翰林院に入った。これから乾隆三十一年冬（一七六六年）知府として広西省鎮安府への赴任まで、翰林院で編集の職に転んできた。『甌北集』に趙翼が序文を求める人は、袁枚以外、全部北京で趙翼に知り合った。そして、袁枚を含めて、全部翰林院の経歴を持っていた。

資料三 乾隆二二年（一七五七年）汪由敦「甌北初集序」

叩其所學、自秦漢以來詩、古文源流、已皆窺涉津奧、遂延課兩兒子。余筆墨填委時、間亦屬具草、初猶逞駢弛才、繼乃益肆力於古。嘗見其閱前人集一過、輒不復省視、然其中真氣息真境地、已無不洞燭底蘊、間出一語評騭、輒如鐵鑄、覆按之卒無以易也。……已而官中書舍人、入直樞要、詔命奏劄、援筆立就、無不中窾會、余深倚其仗助。然君不自以為能、退直之下、益沈思旁訊、以古作者自期、嘗一月中作古文三十餘篇、篇各仿一家示余、余為指其派系所自、君輒以為不謬、每相視而笑。

資料四 乾隆四二年（一七七七年）蔣士銓「甌北集序」

官中書舍人、入直樞要、進奏文字、多出君手。每歲秋、扈從出塞、戎帳中無几案、君伏地起草、頃刻千百、言不加點。辛巳以第三人及第、入翰林、名益爆、丐詩文者、戶屢恆滿、君濡墨伸紙、無不滿其意而去。

資料五 趙翼『曝簷雜記』

(乾隆帝) 或作詩、或作畫、而詩為常課、日必數首、皆用硃筆作草、令內監持出、付軍機大臣之有文學者、用摺紙楷書之、謂之詩片。遇有引用故事而御筆令注之者、則大臣歸、遍繙書籍、或數日始得、有終不得者、上亦弗怪也。余扈從木蘭時、讀御製「雨獵詩」、有著製二字、一時不知所出。……余直軍機時、見詩片乃汪文端(由敦)、劉文正(統勳)所書、其後劉文定(綸)繼之。

※『甌北集』序文作者

蔣士銓 乾隆十九年明通榜 科舉の同年

袁枚 乾隆四年進士 翰林院庶吉士

王鳴盛 乾隆十九年會試一甲 科舉の同年・

翁方綱 乾隆十七年進士「歲己卯庚辰(二四―二五)間、予與耘菘先生鄰居寄園舊址」

吳省欽 翰林院の同僚「閒闊以來(二六)、兩更歲甲」

祝德麟 乾隆二八年進士 趙翼を房師と称する 乾隆二七年順天鄉試に趙翼の彼の

閱卷官と推測する

錢大昕 乾隆十九年進士 科舉の同年

▼地方に赴任する時期

辺陲の鎮安府に四年の生涯を送って、この間に滇の軍務に携えると命じられて、一度今の雲南省の南方まで赴いた。そして、乾隆三五年(一七七〇年)広東広州府の知府に転任し、一年を経て、貴西兵備道に昇進したが、後の乾隆三七年(一七七二年)広州任上に裁判の不正という件に訴えられ、降級の処罰を受けた。この際に、仕官への倦みに耐えず、母の扶養を理由として、辞任して故郷に戻った。彼が地方長官に務めるのは、約六年であって、この間の詩は主に紀行の詩であるが、北京で知り合った官僚たちとの贈答を題目とする作品も見える。

資料六 乾隆三四年(一七六九年) 趙翼「述庵璞函緣事罷官亦從軍來滇卻贈」(卷一五)

幾載京華共酒樽、豈期微再相親。翻愁日下無名士、卻喜天南有故人。株累驚心金齒戍、巢痕回首玉堂春。好將戎幕聯詩社、吟徧蠻鄉景物新。

○述庵、王昶、沈德潛弟子、乾隆十九年進士、入直軍機。

○璞函、趙文哲、沈德潛弟子、乾隆二七年特授内閣中書、入翰林院方略館、二九年入直軍機。

資料七 乾隆三六年(一七七一年) 趙翼「用璞函韻寄述庵兼東松茂觀察儉堂其三」(卷

一八)

遙認西行禮遇優、榕巢刺史擅新猷。論文應有聯牀話、料敵全非築室謀。貴客傾人邛邑令、新詩懷古武鄉侯。送君兼憶長安舊、曾共消息雪滿樓。

○松茂觀察儉堂、查礼、時に四川省松茂道觀察を務めた。彼が「榕巢函」を描いたため、榕巢刺史も彼を指す。

○邛邑令、乃相謂曰、(臨邛)令有貴客、為具召之。並召令、令既至。卓氏客以百數、至日中、謁司馬長卿。(『史記』「司馬相如列伝」)

○武鄉侯、建興元年封(諸葛)亮武鄉侯。(『三國志』「蜀書五・諸葛亮伝」)

▼故郷に隠居する時期

趙翼は、乾隆三十八年（一七七三年）故郷に到着して、嘉慶十九年（一八一四年）の他界まで、著書に丹念してきた。その『甌北集』は、この長い四十一年間、彼はほぼ故郷あたりの江蘇省と浙江省で活動していて、乾隆五十三年（一七八八年）両広総督李侍堯の誘いを応じて台湾の反乱鎮圧のために福建に赴くこともある。そして、乾隆六十年（一八九五年）江蘇巡撫に着任した費淳は、趙翼が彼の閱卷官であるため、趙翼に弟子の礼を取る。嘉慶四年（一七九八年）漕運総督に昇進した蒋兆奎も、費淳と同じ経緯である。つまり、故郷に戻した趙翼は、単なる隠者より、地元活躍している名士という面影が強いと思われる。

資料八 嘉慶元年（一八九六年）趙翼「七十自述其十八・二二・二八」（卷三八）

藥餌多年病漸消、回看同輩盡旌旄。胸中五嶽平猶起、頭上千薪積已高。老態豈堪還舞袖、交情難受是綈袍。濟時功業原須早、搔首徒深感二毛。

烽火遙傳海上洲、故人邀我作閩遊。也因國事來焦額、豈必邊功自出頭。人命死生三寸筆、軍儲贏縮五更籌。誰知大戟長槍裏、薄有書生一得謀。

昇平郊藪鳳麟遊、無限英才要出頭。詞賦爭誇今李杜、山林並少假巢由。衰殘敢自居耆宿、宏獎翻愁誤俊流。聊與擴開新眼界、梯桃更上一層樓。

資料九 嘉慶六年（一八〇一年）趙翼「京口晤制府費公」（卷四三）

榮戟南邦坐鎮雄、頻叨嘘拂到衰翁。即今晚景優閒日、猶在餘光照耀中。守洛奇章榮白傳（注曰、牛僧孺為白居易科舉所取士、牛以宰相留守洛京、居易住履道里、正在管內、遊從甚密）、興唐房相溯王通。情深最是停舟話、為我遲留半日風。

○奇章、牛僧孺を指す。「牛僧孺封奇章縣子。」（『旧唐書』「敬宗本紀」）彼の詩に対する批評にも、この影響が貫いている。

資料十 乾隆五十年（一七八五年）王鳴盛「甌北集序」

歸田以來、編刻所為詩約二千篇寄予序之。予雖誦一周、其在朝之作、所交之友皆吾友、所歷之境皆吾境、予語所不能道者、耘菘若代吾道之。老病局縮鄉里、顧瞻玉堂、如在天上、今乃舊遊歷歷、影現心目、省憶生平、欣然以喜。其出塞之作、境奇詩益奇、皆人耳所未聞、目所未覩。恍挾我之尻輪神馬、而翱翔乎萬里之外。

資料十 乾隆五十年（一七八五年）翁方綱「甌北集序」
今耘菘之詩哀然成帙、既登於梓者二十七卷、郵寄示予、且屬以一言。君方掌教邗江之上、而予於二千里外披誦前後諸、坐臥不能去、宜有以發揮集中之所得矣。然旬日以來把卷馳讀、如見先生雙眸射人、搖膝撚髭於煙月之間、而其詩境碑兀奇宕、音在空外。昔人評魯公書力透紙背、與褚河南書用筆高出紙上存許者、其理正同。吾安得執一解以印定之？所謂欲著言銓、輒落邊際、視往日之匆匆未暇舉似者、又不同也。它日晤耘菘、必有所以相質者矣。

資料十一 乾隆五十年（一七八五年）袁枚「甌北集序」

今夫越女之論劍術曰、妾非受於人也、而忽自有之。夫自有之者、非人與之、天與之也。天之所與、豈獨越女哉。以射與羿、弈與秋、聰與師曠、巧與公輸、勇與賁、育、美與西施、宋朝、之數人者、俱不能自言其所以異於衆也。…此皆弈與秋、師曠、公輸、賁、育、西施、宋朝之所不能言、而惟越女能言之者也。余之為耘菘言者、亦如此而已矣。

王鳴盛は趙翼詩の縦横自在の表現より、北京における共通的な仕官経験に興味が深く、翁方綱の序文には、趙翼詩の「碑兀たり奇宕たり」にマイナス的な感覚を潜めている。代わりに、袁枚の序文は、趙翼の経緯を触れず、ただ趙翼の天才に対して賛美と弁護を發した。だとすると、袁枚と一緒に性靈を鼓吹する趙翼以外には、もう一つの官僚の間に活躍している趙翼があることをわかる。

二、趙翼詩における白居易意識

趙翼の『甌北詩話』には、白居易の詩歌を高く評価して、白居易の経緯に考証を施したと知られる。実は、彼の創作にも、白居易に関する典故を愛用する。もし袁枚と蔣士銓と比べると、趙翼の作品には、その使い頻度が遙かに上回る。この事典の使い方考察すれば、趙翼の心理と交遊の状況が窺える。

▼政治に関する典故

山詩凡數次訂輯、其長慶集經元微之編次者、分諷諭、閒適、感傷三類、蓋其少年欲有所濟於天下而托之諷諭、冀以流聞宮禁、裨益時政、閒適、感傷則隨時寫景、述懷增答之義也。閒適、感傷者、獨善之義也。大指如此、至後集則長慶以後無復當世之志、惟以安分知足、翫景適情為事、故不復分類、但分格詩律詩二體、隨年編次而已。今流傳諸本雖不免有前後錯雜之處、然大概尚仍其舊。（『甌北詩話』卷四）

①万丈の裘

白居易「新製綾襖成感而有懷」安得大裘長萬丈、與君都蓋洛陽城。

資料十二 「偶然其六」 乾隆二八年（卷二一）

杜陵廈萬間、白傳裘萬丈。後人讀其詩、肅然起敬仰。雖謂一身窮、不忘天下想。吾觀拾遺老、身世困搶攘。固無藉手處、為民籌教養。香山歷官多、所至文酒賞。未聞康濟略、政績著天壤。區區浚六井、小惠亦未廣。詩人好大言、考行或多爽。士須儲實用、乃為世所仗。

資料十三 「苦寒」 嘉慶十四年（卷五一）

白傳大裘長萬丈、杜陵廣夏拓千間。書生開口論康濟、紙上空談祇汗顏。

▼信仰に関する典故

②兜率と海山

白居易「答客說」吾學空門非學仙、今君比說是虛傳。海山不是吾歸處、歸處即應兜率天。

資料十四 「題吟薌夢遊竹葉庵圖」 乾隆二四年（卷七）

白傳學佛不學仙、海山不歸歸兜率。東坡先生慕仙者、晚年好論養生術。我為闌筆兩相較、苦禪畢竟苦戒律。不如神仙足遊戲、詩酒聲色百不失。此語空持付畫餅、悠悠世網拔未出。慧業既慳作佛緣、凡骨更乏成仙質。

○吟薌、張玉川、武進人、画師、時に汪由敦の宅に寓する。

資料十五 「翰林院有土地祠相傳祀韓昌黎詩以解嘲」 乾隆二六年（卷九）

白傳已列蓬萊仙、曼卿更拜芙蓉主。

○蓬萊仙・芙蓉主、白居易為海山院主、石曼卿為芙蓉院主。（『詞林海錯』「仙證」）

資料十六 「泊舟琵琶亭作」 乾隆三十八年（卷二十）

香山四十六七歲，正是左遷江州日。我今亦以鐫秩過，計年亦是四十七。後先相距一千載，浪跡偶然同一律。公之風流在天壤，不但詩傳長慶集。笑我區區腐儒陋，敢以鴻尼翮相匹。獨疑公也本恬退，蟬蛻塵埃慕兜率。龍門寺詩見雅尚，曳尾泥中得要術。

○龍門寺詩、白居易「秋日與張賓客舒著作同遊龍門醉中狂歌凡二百三十八字」丈夫一生有二志、即須先濯塵土纓。況吾頭白眼已暗，終日戚促何所成。

○曳尾泥中、白居易「九年十一月二十一日感事而作」麒麟作脯龍為醢、何似泥中曳尾龜。

資料十七 「五十初度其一」 乾隆四一年（卷二三）

佛求仙枉費功、年來漸覺總成空。歐陽但有詩三上、徐邈時於酒一中。材不材間身可老、味無味處句難工。海山兜率俱安在、只合頭銜號長翁。

資料十八 「遷興」 乾隆五八年（卷三六）

海人豪氣未除、可憐七尺落蓬廬。漸看名姓沈鄒湛、肯數英雄到本初。生也有涯憂不盡、古而五死樂何如。海山兜率俱安在、頭白惟餘一卷書。

▼隱棲に関する典故

『雲溪友議』引『本事詩』謂香山有妓樊素善歌、小蠻善舞。嘗為詩云、櫻桃樊素口、楊柳小蠻腰。是樊素、小蠻本兩人也。然香山集無此詩、其鬻駱馬、遣楊柳枝見於「不能忘情吟」者、曰、駱返廐、素反閨。素兮素兮、為我歌楊柳枝。與爾歸醉鄉去來。（『甌北詩話』卷四）

③樊と小蠻と駱馬

白居易「不能忘情吟序」樂天既老、又病風。乃錄家事、會經費、去長物。：噫。予非聖達、不能忘情、又不至於不及情者。事來攪情、情動不可柅、因自哂、題其篇曰、不能忘情吟。

資料十九 「即事」 乾隆二六年（卷九）

拙妻一旦學豪奢、典衣買得雙鬢丫。先生聞之大弗喜、累我長安多索米。君言此女七分姿、好比香山楊柳枝。待他十五盈盈候、莫又回嗔作喜時。

資料二十 「舟泊京口王夢樓前輩邀遊北固山蒜山諸勝置酒江閣流連竟日即席有作」 乾隆

四二年（卷二四）

滇嶠歸來鬢未秋、高籤高擁一窗幽。詩名尚愛稱才子、官位幾忘是故侯。碧海鯨魚傳麗作、楊枝駱馬遣閒愁。羨君天與無花眼、燈下蠅頭寫更遒。

○王夢樓、王文治、江蘇丹徒人、乾隆三五年一甲三名進士、翰林院編修を授かる。

資料二一 「遣愁」 嘉慶十一年（卷四八）

殘燭風前剩半枝、及時行樂尚嫌遲。長星勸汝一杯酒、青鏡任他雙鬢絲。白傅徵歌親教曲、右軍分鬻老含飴。古人未必無先見、漏盡鐘鳴最可思。

○親教曲、白居易「伊州」老去將何散老愁、新教小玉唱伊州。

資料二二 「生計」嘉慶一六年（卷五三）

偶然高興早歸田、又不能營什一錢。佐飯有羹惟剪韭、製裘無力且披綿。虛誇紅藥翻塔色、漸似黃楊厄閏年。只有香山解娛老、楊枝駱馬重流連。

④九老會

香山九老圖故事、『新唐書』謂居易與胡杲、吉旼、鄭據、盧真、張渾、狄兼謨、盧貞謙集、皆高年不事者、人慕之、繪為九老圖。此未考『香山集』也。其自序七老會詩謂、胡、吉、劉、鄭、盧、張六賢皆多年壽、余亦次焉。在履道坊合成尚齒之會。七老相顧以為希有、各賦七言六韻一章以紀之。（『甌北詩話』卷四）

資料二三 「納涼」乾隆二六年（卷九）

唐賢僅得三分一、漫擅人間九老名。（注曰、上擇文武大臣及在籍大臣年老各九人、繪圖繼香山九老）

資料二四 「程霖岩湯葵溪楊靜叔汪屏周四人皆甲午生舉同甲會繪圖紀盛次韻奉題」乾隆

五七年（卷三五）

耆英高會列長筵、難得生辰共一年。健比杜陵藍水宴、數符商嶺紫芝仙。官雖大小皆華髮、齒不參差恰並肩。漫向香山圖九老、四人同甲倍堪傳。

○程霖岩など、程景傳：年逾八旬猶偕湯銘書汪萍洲楊靖叔爲四老同甲會優遊鄉里稱人瑞云。（『粟香筆記』「自怡詩集」）

資料二五 「寄壽子才八十」乾隆六十年（卷三七）

跋扈詞場一代雄、白鬚如雪氣如虹。儒仙句曲陶弘景、詩搜山陰陸放翁。地占六朝金粉後、名高九老圖畫中。錯疑天寵才人極、福壽都教付此翁。

資料二六 「山茶盛開邀去年諸同人小集時稚存遠出劉瀛坡總戎新入會」嘉慶六年（卷四

三）

同人會中有遠行、正憐七老少盧貞。天緣巧補香山數、（香山繪圖初本七老）、失一兵仍得一兵。

○劉瀛坡、劉烜、武進人、武舉人、滇の征討に参加し、浙江衢州鎮總兵に務めた。

⑥履道里

及刺杭州歸、有餘貲、又買東都履道里楊憑宅、有林園池館之勝、遂有終焉之志。

香山又有送牛相公出鎮淮南詩云……自注、元和初、牛相公應制策登第、予為翰林考覈官云。後僧孺以宰相留守洛中、香山方居履道里、過從甚密。（『甌北詩話』卷四）

資料二七 「鬻田」乾隆四三年（卷二四）

香山歷官十五政、履道買宅兼林泉。晚年居貧鬻駱馬、並擬斥賣洛下田。坡公出守七大郡、餘力儘足資南遷。

資料二八 「自樂儀書院移主揚州安定講習呈在籍謝未堂司寇秦西巖觀察張松坪吳涵齋兩編修皆詞館前輩也」 乾隆四十九年（卷二八）

名都任務萃朝簪、居里猶餘四翰林。履道衣冠唐洛下、稷亭觴詠晉山陰。地多耆舊應編傳、社有詩篇互賞音。到此自慚年輩晚、論科都比野夫深。

○謝未堂、謝啟昆、江西南康、乾隆二六年進士、庶吉士、翁方綱弟子。

○秦西巖、秦瀛、江蘇無錫人、乾隆三九年舉人、授內閣中書。

○張松坪、未詳。

○吳涵齋、未詳。

資料二九 「京口晤制府費公」 嘉慶六年（卷四三）

即今晚景優閒日、猶在餘光照耀中。守洛奇章榮白傅、興唐房相溯王通。

資料三十 「清江浦送費制府入為大司馬賀遷惜別情見乎詞其二」 嘉慶八年（卷四五）

孔融檄改康成里、思黯車臨履道坊。十載分榮誰不羨、真看桃李蔭門墻。

「吳門范洽園編修來宗為余作八十壽詩君今歲亦稱七十之觴謹賦三律酬賀」 嘉慶十一年（卷四八）

同此懸弧遞舉觴、瑤函先枉祝釐章。千秋豈論科前後、兩敵終分力弱強。暮景飛騰君尚壯、阿婆塗抹我徒傷。香山倘許聯吟社、徑欲想從履道坊。

○范洽園編修來宗、范來宗、江蘇吳人、乾隆四十年進士、翰林院編修。

資料三一 「祝錢竹初移新居有林壑之勝」 乾隆五六年（卷三四）

十笏香嚴結淨緣、養閒難得是中年。草堂將寫種司諫、州宅堪誇白樂天。絲竹肉應隨處設、畫詩書總後來傳。

○白居易「答微之誇越州州宅」 賀上人回得報書、大誇州宅似仙居。

○錢竹初、錢維喬、武進人、乾隆二七年舉人。

⑦洛社

彥博雖富貴而接物謙下、尊德樂善、如恐不及。其在洛也、洛人邵雍、程顥兄弟皆以道自重、賔接之、如布衣交。與富弼司馬光等十三人用白居易九老會故事、置酒賦詩相樂、序齒不序官、為堂繪像其中、謂之洛陽耆英會。（『四庫全書總目提要』「高氏三宴詩集三卷附香山九老詩一卷」）

資料三二 「新春招程霖岩湯蓉溪二丈暨莊學晦家緘齋小集」 乾隆五七年（卷三五）

庸知履舄交、中有昇平瑞。一葉知秋風、一花驗春氣。自非仁壽期、曷此耆耄萃。作詩傳他年、或可洛社繼。

○莊學晦、莊繩祖、武進人、乾隆十五年舉人。

○家緘齋、趙味辛、武進人、乾隆四一年舉人。

結論

趙翼は晩年洛陽に隱棲している白居易に関する典故を愛用する。彼の詩話には、同じ典故についての考証が多く行われる。それは、彼は自分の仕官経歴を晩年の白居易と重ねるためである。彼の江南地方の郷紳との交際も、彼の仕官経歴により結束されものと思われる。故に彼を廻って、その創作をする詩人群れは、「性靈派」の詩風に漠然する人が多い。この例を通して、清中期の南方詩壇の複雑性が窺え、その実像を得るには、彼らの作品と交遊について、さらに調査を施さなければならない。